

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19790839

研究課題名（和文）休職に至る就労者を取り巻く環境と就労者の特性について

研究課題名（英文）The characteristics and the environment of the psychiatric outpatients who were absent from work

研究代表者

中村 晃士（NAKAMURA KOJI）

東京慈恵会医科大学・医学部・助教

研究者番号：00291691

研究成果の概要：精神科通院患者 73 名、一般就労者は 232 名から基礎データ（職場内での心理的負荷、職場外での心理的負荷、GHQ-30[精神の健康度]、NEO-FFI[人格傾向]、MPS[完全主義傾向]、自尊感情評価尺度など）を収集することが出来た。休職の背景には、休職者の完全主義傾向、神経症的な性格が大きく影響していること、女性就労者では上司との関係が影響していることが明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	240,000	1,640,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学／精神神経科学

キーワード：産業精神医学、メンタルヘルス、休職、職場環境、完全主義傾向、自尊感情

1. 研究開始当初の背景

近年、就労者が何らかの精神科的問題をきたして休職に至るケースが増えてきており、その中でも「適応障害」と呼ばれる病態を呈するものが多い印象がある。つまり環境の問題か個人の問題からか、職場で不適応を起こし、そのために精神科的症状を呈して精神科受診に至るというものである。一方で、職場では休職を繰り返したり、退職の決断をしなければならないといった就労者の対応に苦慮している現状がある。適応障害という病態を考えた場合、その要因は大きく環境と個人の問題の2つに分かれる。環境としては、

近年の雇用形態、労使関係の変化などがあり、就労者を取り巻く環境が大きく変化してきているという現実がある。最近では過労死、パワーハラスメントなど、職場の過酷な状況を表す言葉もよく耳にする。その一方で「最近の若い者は弱くなった」とも言われており、最近の就労者のメンタリティの弱さ、ストレス耐性の低下といったことも考慮にいれなければならない。

こういった現状を踏まえ、現代人の職場での不適応の問題を多角的に捉え、実際にどういった要因により不適応を起しているのか、すなわち個々の問題を背景としているの

か、それとも環境要因が大きく影響を及ぼしているのかを明らかにすることが重要な課題であると考えられる。このことが明らかとなることによってそういった患者、就労者をどのように支援していったらよいか、自ずと対応も見えてくるに違いない。こういった要因が深く関わってきているかを明らかにすることが職場で不適応を起こしている患者をサポートする上においてとても重要と思われる。

2. 研究の目的

精神科疾患のために休職に至る就労者を取り巻く環境およびその就労者の特性、性格傾向などを明らかにすることが本研究の目的である。精神科通院中に休職に至った患者に対して、Multidimensional Perfectionism Scale (MPS) の邦訳版、NEO - FFI 人格検査、GHQ30、Rosenberg の自尊感情評価尺度の4つの自己記入式質問紙を施行した。また独自に作成した患者背景調査票により、患者を取り巻く環境要因について調査した。

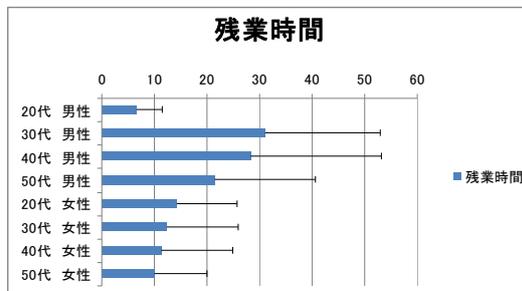
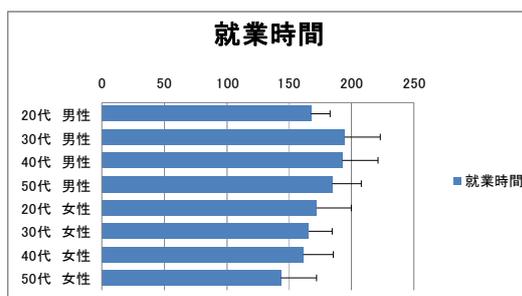
3. 研究の方法

精神科外来に通院していて精神科疾患のために休職に至った患者に対して、完全主義傾向の評価尺度である Multidimensional Perfectionism Scale (MPS) の邦訳版、NEO - FFI 人格検査、GHQ30、Rosenberg の自尊感情評価尺度の4つの自己記入式質問紙、および独自に作成した調査項目により患者の完全主義を含む性格傾向、自己評価、患者を取り巻く環境について調査を行い、統計学的に検討した。

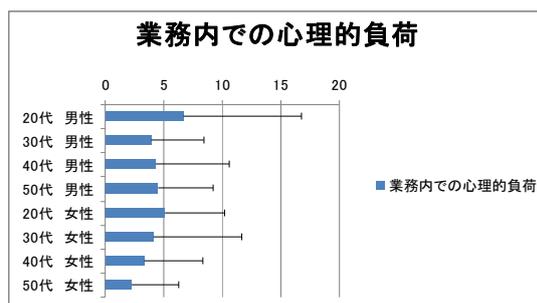
4. 研究成果

精神科外来に通院している休職者の方に施行した質問紙では、F3 圏と F4 圏の合計 73 名（男性 55 名、女性 18 名）の回答を得ることが出来た。一般就労者に同様の質問紙を施行した結果、241 名の回答を得ることが出来た。得られた 241 名の回答のうち、休職した者とデータに欠損値のあるものを除いた 229 名を解析の対象とした。

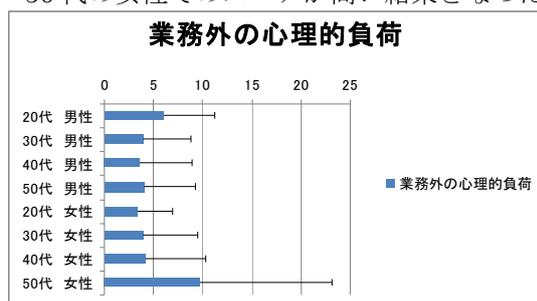
まず一般就労者の結果をお示しする。年代別にみても、就業時間、残業時間ともに 30 代の男性が長く、近年の 30 代男性の自殺者数の増加と無関係ではなさそうである。



しかし業務内での心理的負荷をみると 30 代の男性ではさほどスコアは高くなく、今回使用した質問紙ではその心理的負担をうまく拾えていない可能性があることが示唆された。



また業務外での心理的負荷は 20 代の男性と 50 代の女性でのスコアが高い結果となった。



20 代の男性では、転居や結婚などがあり、仕事以外での負担が大きいと考えられた。また 50 代の女性はサンプル数が 3 と少ないがやはり家庭内での子どもの独立や両親の介護などの負担が大きいたことが影響していた。

また精神的な健康度に影響を与えている因子をロジスティック回帰分析を行って検討した結果を次に示す。

ロジスティック回帰分析によるGHQスコアの関連因子				一般就労者
従属変数	関連因子(独立変数)	Score Chi-Square	Pr > ChiSq	
GHQスコア	神経症傾向	100.01	<.0001	
	仕事への満足度	9.09	0.0026	
	残業時間	6.50	0.0108	
	自身の行動への疑い	5.50	0.0190	

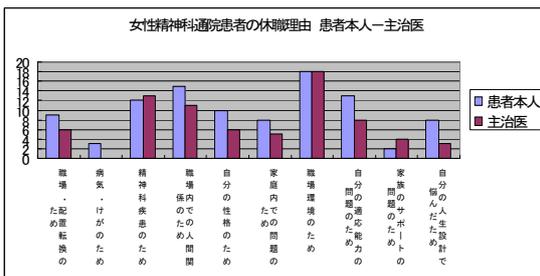
一般的に精神的な健康度を表す GHQ スコアに対しては、その人の「神経症傾向」が最も影響をしており、次いで「仕事への満足度」「残業時間」「自身の行動への疑い」の順で取り込まれた。いわゆる職場や家庭の心理的負担は大きく影響せず、性格傾向や仕事への満足度が大きく影響しているとの結果は興味深い。

ロジスティック回帰分析によるGHQスコアの関連因子				一般就労者
従属変数	関連因子(独立変数)	Score Chi-Square	Pr > ChiSq	
希死念慮とうつ傾向	神経症傾向	52.75	<.0001	
	残業時間	13.43	0.0002	
	業務外の心理的負荷	8.18	0.0042	
	自尊感情	8.12	0.0044	
	配偶者の有無	4.16	0.0414	
	職場で相談できる人いる	4.17	0.0411	

また上の表の通り、「希死念慮とうつ傾向」に対しては、「神経症傾向」「残業時間」「職場外の心理的負荷」の順で取り込まれており、ここにも「職場内での心理的負荷」は影響を与えておらず、就労者のうつを考える上では重要な結果となった。すなわち、就労者の職場内での環境だけでなく、その人全体をとりまく性格傾向を含めた特性を把握することがメンタルヘルスの観点で重要であることが分かった。

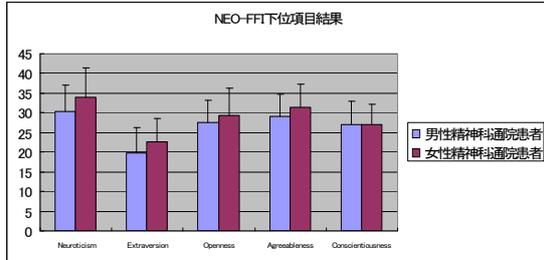
次に休職した精神科通院患者のデータの結果について述べる。

まず休職した理由に関して、主治医が考えている休職した理由と、休職した本人の考えている理由は異なっており、そこが治療の焦点となるのではないかと推察された。しかし結果としては両者の間に齟齬はなく、下記のグラフからも分かるようにどちらかといえば休職した本人の方が自分の性格などを問題視していることが分かった。



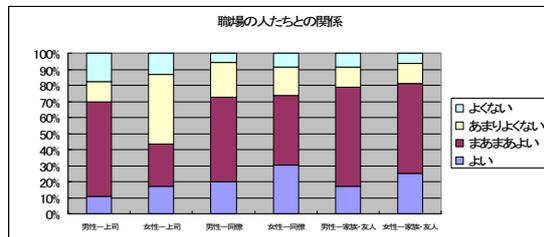
また休職者は一般就労者に比べて、完全主義傾向が高く、自分のした行動に対して疑いを持ちやすい、すなわち自分に自信がなく自分のした仕事がうまく出来たかどうかを気にしすぎ疲れてしまっている傾向が見てとれた。また休職者の方が神経症的な傾向が高く、外交的な性格傾向は低いことも明らかとなった。

次に NEO-FFI の結果を以下に示す。



男女で比べてみると、男性より女性の方が神経症傾向が高く、また同調性も女性の方が高い傾向にあり、女性の方が職場内での人間関係に気を遣い疲弊しているのではないかと推察された。

さらには下のグラフに示したとおり女性の休職者は職場内の人間関係において、男性より有意に上司との関係が悪く、このことが職場での不適應の一つの原因になっていることが分かった。



以上の結果は以前からある職場の休職者に関するメンタルヘルス研究にはない視点からの研究であり、休職者自身の完全主義傾向や神経症傾向といった性格傾向が休職に大きく影響していることが分かったことは大きな成果であると思われる。また女性休職者の特有な問題として「上司との関係」は今後もキーワードとして重要なものであると考えられ、女性の就労者をサポートする上では大変意義のある結果であったと思われる。職場において不適應を起こした患者さんを診察する場面は増加の一途にあり、こういった研究は患者さんをサポートするときの焦点を明確にすることができ、我々精神科医の日常診療の中で大いに役立つものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1) 中村晃士. 産業メンタルヘルス (4) 職場における人格障害. 日本医事新報. NO. 4374 : 42-45, 2008

[学会発表] (計 3 件)

1) 中村晃士、瀬戸光、沖野慎治、森美加、小野和哉、中山和彦. 女性就労者が休職に至る背景—精神科外来通院患者の調査・男女の比較検討から—. 第 28 回日本社会精神医学会, 宇都宮, 2009 (2 月)

2) K Nakamura, N Kobayashi, Y Ochiai, S Shinagawa, M Sato, K Obuchi, T Nakanishi, K Ono, W Yamadera, K Nukariya, H Sue, H Miyata, T Agata and K Nakayama. The characteristics of the psychiatric outpatients who absent from the work in Japan. XIV World Congress of Psychiatry, The Prague, Czech Republic, September, 2008

3) 中村晃士、森美加、大淵敬太、山寺亘、中山和彦. 現代の就労者と同一性危機. 第 15 回日本産業精神保健学会, 大阪, 2008 (6 月)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 晃士 (NAKAMURA KOJI)

東京慈恵会医科大学・医学部・助教

研究者番号 : 00291691